

唐戸山神事相撲にみる日本のスポーツ

やまもと ひろお みやもと さとし
山本 博男・宮元 智

I 唐戸山神事相撲の概略

1. 由 来

唐戸山神事相撲は、羽咋神社の祭神である磐衝別命（いわつきわけのみこと）への奉納相撲である。磐衝別命は第11代垂仁天皇の皇子であり、羽咋の地で善政をしき、若者を集めて武勇を養い、相撲をとらせて身体を鍛えさせたという。彼の命日である9月25日にその遺徳を慕い、近隣から力士が集まり、現在の羽咋市の唐戸山で相撲をとってその霊を慰めたのがこの神事相撲の始まりとされる。以後二千年にわたって継承されている。唐戸山の土俵は、上野国土師神社（現群馬県藤岡市）、摂津国住吉神社（現大阪府堺市）と並ぶ日本三辻と呼ばれる日本最古の土俵（相撲壇）の1つである。

この神事相撲では、力士は東西ではなく、出身地によって邑知瀉を境にした「上山」（押水、河北、氷見方面）と「下山」（鹿島、志賀、奥能登）とに分けられる。さらに特徴的な点は、「水なし、塩なし、待ったなし」といわれる作法である。このことによって仕切りから取り組みまでの時間が短くなり、勝負自体が簡単明瞭で一般大衆に受け入れられやすいものになっている。

2. 神事相撲当日の概略

前述の通り、唐戸山神事相撲は毎年9月25日に行なわれる。当日は、相撲に先立って（午後2時より）唐戸山から約1km離れた羽咋神社で相撲祭が行なわれ、立行司（大関を決定する奥弓の関場の行司）の任命祭（図1）や、前年の大関の掲額を奉納する大関奉額祭（図2）が行なわれる。



図1 立行司任命祭

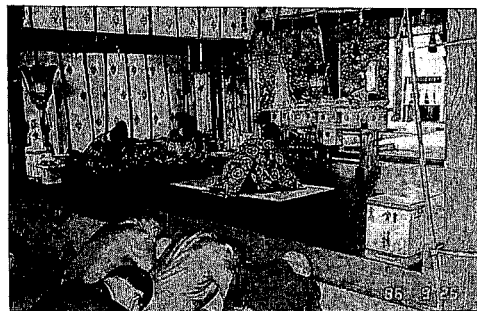


図2 大関奉額祭

羽咋神社での相撲祭が終わる頃(午後3時頃)、唐戸山の土俵では小学生の稽古どりが行なわれる(図3)。それが終わると、協賛相撲(図4)に移り、小決勝、中決勝、十人弓、特別対抗戦、トーナメント決勝、大決勝(図5)という順に進められる。この協賛相撲は神事相撲に先立って土俵を盛り上げるものである。勸進元(主催者)はこのために、時に大相撲の力士や社会人の強豪チームを招待する。

午後8時近くになると中入りになり、相撲場の四隅には篝火がたかれ、相撲場は神事の場という雰囲気になる。神事大鼓が披露され(図6)、力士たちの土俵入り(図7)、相撲甚句と進んだ後、神事相撲の取り組みになる。

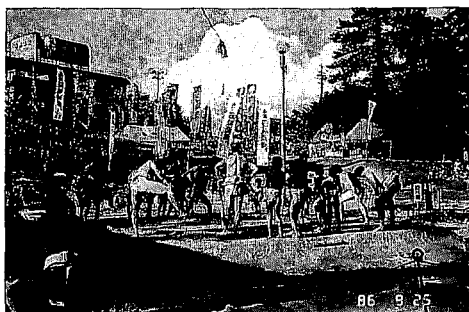


図3 小学生の稽古取り

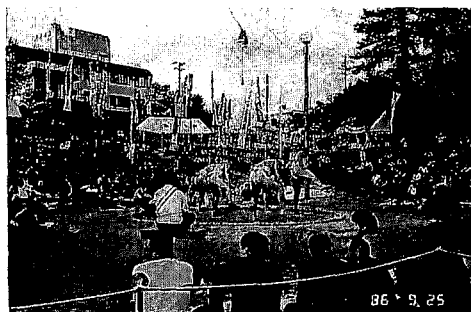


図4 協賛相撲

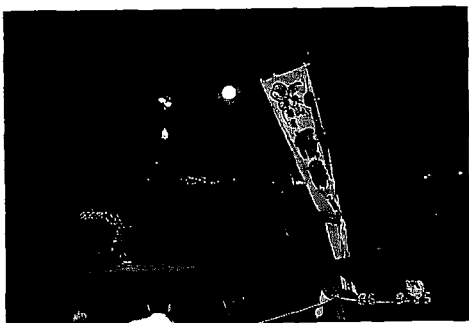


図5 大決勝

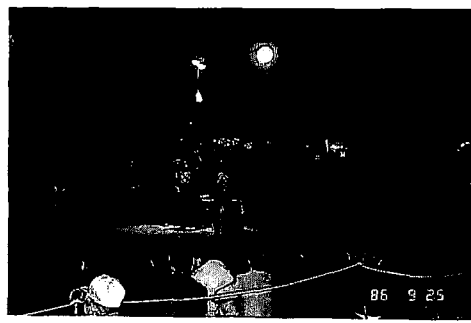


図6 神事大鼓

神事相撲の取り組みは、前弓、中弓(図8)、奥弓の順序で進められ、最後の奥弓の関場で上山、下山の大関候補が取り組み、その年の唐戸山の大関を決定する。この取り組みは、上山下山両山の検査役から必ず物言いがつき、協議になる(図9)。結局は行司が両者を大関であると宣言するのである。これを「両関」と呼ぶ。両大関候補は、協議の結果を待たずに、取り組みが終わるとすぐに仲間の力士たちに担がれて、羽咋神社へ走り、戦勝報告をする。羽咋神社からは大関に五色(賞證、由来書、目録、白絹の御幣、高張りちょうちん)が授けられる。



図7 力士たちの土俵入り

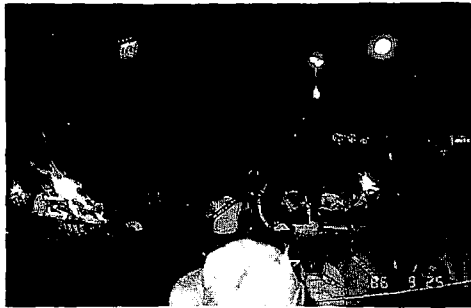


図8 中弓の取り組み

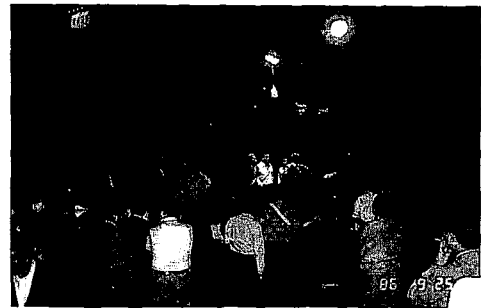


図9 奥弓後の「物言い」

唐戸山の大関になった者は、引退後親方になる。また翌年の羽咋神社での相撲祭では、前述の通り掲額が奉納される。なお、両山の大関候補は、各々の親方衆により、実力や唐戸山への貢献度などを考慮して選考された。

II 唐戸山神事相撲と大相撲

こうした歴史的経緯を踏まえながら、筆者らは、所謂「水なし、塩なし、待ったなし」で知られる唐戸山神事相撲の特徴を裏付ける基礎資料を得るため、VTR一式を持参、昭和61年9月25日(木)、羽咋市唐戸山相撲場へと赴いた。当日は、終日晴天に恵まれ、午後1時羽咋神社この相撲祭における行司任命祭、前年度大関奉額祭にはじまり、午後10時半奥弓に終わる一連の唐戸山神事相撲行事をVTRに収録した。

羽咋神社への通りには露店がたち並び、神社境内には見世物小屋が開かれ、祭り一色の賑わいをみせていた。又、出世のぼり旗が林立する唐戸山相撲場には、加越能三州からの参加力士に、招待チームとして和歌山県庁チームを交え、熱戦が繰りひろげられた。とりわけ、結びの一番奥弓では「上山」の西の湖良三氏(33歳、富山県氷見市出身)と「下山」の石坂尚氏(30歳、石川県七尾市出身)が激突、大関の位を分け合い、それぞれ同僚の力士に担がれ、羽咋神社へ戦勝報告に走り、約7時間に亘る熱戦の幕を閉じた。筆者らは、能登に伝えられる素朴で親しみのある素人相撲の魅力と、あっという間の幕切れによる興奮を胸に帰路に着いた。

筆者らは、唐戸山神事相撲における「水なし、塩なし、待ったなし」の勝負が、一般に受け入れられやすくなっている原因の1つに、「待った」、「仕切り」及び「取り組みの長さ」などに特徴があるのではないかと考え、大相撲との比較を試みた。大相撲の取り組みに関しては、昭和61年九州場所、13日目、14日目及び15日目(千秋楽)の中入り後それぞれ19番計57番をVTRに収録した。この大相撲VTR記録と、前述の唐戸山神事相撲VTRを、「待ったの回数」、「仕切り時間」及び「取り組み時間」の各項目について計測し、表1に示した。但し唐戸山神事相撲の各項目については、中弓以降の取り組みを計測した。

その結果、唐戸山神事相撲は、大相撲に比べ、「待った」、「仕切り時間」がなく、取り組みそのものが、大相撲のほぼ倍のはやきで決着がついている。この取り組み時間の短かさが、唐戸山神事相撲の中にうまく機能し、最後の取り組み、奥弓で観衆の盛りあがりが高潮に達するように工夫されている。筆者らはこうした点にも、唐戸山神事相撲の中に、日本的な運動文化としてのスポーツの一面と伝承文化に対する日本人の知恵を垣間見ることができた。

表1 唐戸山神事相撲及び大相撲における待ったの回数、仕切り時間(平均)、
取り組み時間(平均)の比較

相撲名称 項目	唐戸山神事相撲 (N=57)	大相撲 (N=57)
待ったの回数	0回	12回
仕切り時間 (最小～最大)	0秒 (仕切りなし)	205.2秒 (145秒～278秒)
取り組み時間 (最小～最大)	7.8秒 (1秒～67秒)	15.1秒 (1秒～120秒)

III 唐戸山神事相撲と古代オリンピック祭

唐戸山神事相撲は、極めて日本的な運動文化の1つであると考えられる。このことをより明確にするために、古代オリンピック祭と比較したい。

唐戸山神事相撲と古代オリンピック祭は、両者とも、その規模こそ違え、ある特定の地域の祭典であり、各々の地域の住民の生活様式に根ざした運動文化である、という面から、いくつかの類似点を見い出せる。

以下に、類似点を挙げてみる。

1. 唐戸山神事相撲と古代オリンピック祭との類似点

(1) 地理的条件

唐戸山神事相撲は、日本列島の中の、能登半島の一地方である羽咋を会場とし、その近隣から選手(力士)が集って技を競う。一方古代オリンピック祭は、初期の頃(BC. 776～724)、ペロポネソス半島西部の祭典にすぎなかった。偶然かも知れないが両者とも半島という狭隘で平地の少ない地域で発生している。

(2) 神を祭る(神事)

唐戸山神事相撲は、第11代垂仁天皇の皇子磐衝別命を祭る。磐衝別命は羽咋神社の祭神である。他方、オリンピック祭は、ゼウスを主神とするオリンポスの神々への信仰に根ざしている。両者とも祭神への奉納競技という点で類似している。

(3) 競技前の準備、供犠

唐戸山相撲は、当日、相撲に先立って羽咋神社で相撲祭が行なわれる。種々の供物がそなえられ、立行司の任命式が行なわれる。オリンピック祭は、祭典1日目は、準備や供犠にあてられ、ゼウスの神像の前で選手の検査が行なわれた。両者とも神前において競技の公正を誓うものである。

また、前者は前年の大関の掲額が羽咋神社に奉納され、後者は優勝者は境内に像を建てる事が許された。

以上のように、唐戸山神事相撲と古代オリンピック祭には、いくつかの類似点が見い出されて興味深い。次に唐戸山神事相撲独自の側面について、考察する。

2. 唐戸山神事相撲の特異点

(1) 観衆の娯楽度

唐戸山神事相撲は、力士と観衆との一体感を伴う日本のスポーツという面が大きい。地域が狭いということもあって、力士たちの多くは近隣の一般人で、顔見知りが多く、観衆の野次は

激しいが、観しみが感じられる。観衆の中には昼間から酒をのんでしきりに野次をとばしたり、誰彼となく話しかけ、相撲談義に花を咲かす者もいる。

(2) 大関候補の選考

上山、下山とも大関候補は、各々の親方衆が話し合いで決定する。実力はあっても数年間は唐戸山で相撲をとった者でなければ選ばれない。唐戸山への貢献度が考慮される。必らずしも実力本位にはならない大関候補の選考方法は、日本という特殊な社会の独特な文化と不可分の関係があると考えられる。

(3) 両 関

大関を決定する奥弓の関場では、上山下山両大関候補の勝敗を巡って必らず物言いがつく。検査役は互いに物言いを付け合い、結局行事は双方を大関と宣言する。両山の大関候補は、協議の結果を待たずに他の力士たちに担がれて羽咋神社へ走り、戦勝報告をする。両方を優勝者即ち大関とする両関と呼ばれる慣習である。

勝負は始めから引き分けに決まっているのであるが、力士たちは真剣であり、観衆は熱狂する。

3. ま と め

以上見てきたように、唐戸山神事相撲と古代オリンピック祭は、地理的条件、実施の方法などの点で類似点を見い出せる。他方、唐戸山神事相撲独特の点もいくつか挙げた。この独特の点、特に大関候補の選考と両関の慣習は、唐戸山神事相撲に限らず、日本という特殊な社会の中で育まれた文化の一面でもあると思われる。大関候補の選考方法や、両関の慣習は、一見不合理なことのような思われるが、歌舞伎、古典落語などの伝統的な日本の文化の手法からみれば、とりたてて奇異なことではない。彼らはその形態や筋書などを数百年間変えていないが、そのこの自体が文化として定着してしまっている。このあたりに、西洋的な合理主義とは別物の、日本的な文化の姿を見ることが出来る。また、他に娯楽が少ない能登半島という地域的な特性と、酒を飲んでほめをはずすという日本人的慣習とが結びついて、唐戸山神事相撲が長く継承されて来たとも考えられる。

参 考 文 献

- 1) 平岡克明 (編)、唐戸山神事相撲史、唐戸山相撲史発行所、昭和 46 年
- 2) 北国新聞掲載、神事相撲、1—45 昭和 61 年 9 月 1 日—10 月 16 日
- 3) 唐戸山相撲協会、唐戸山神事大相撲 (プログラム)、昭和 61 年度版
- 4) 成田十次郎 (編)、体育・スポーツの歴史、日本体育社、昭和 53 年